

めいぼくせんたいはぎ

伽羅先代萩

〔解説〕

天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦戯場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（またき）」、後半は「政岡忠義（まさおかちゅうぎ）」と呼ばれています。

〔あらすじ〕

奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つるきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。

◇政岡忠義の段

梶原景時の妻、栄御前(さかえごぜん)が頼朝公からのお見舞いと称し、毒入りの菓子を持って現れます。栄御前が頼朝公からの菓子が食べられぬのかと、鶴喜代君にその菓子を食べさせようしたところ、千松が走り出て菓子を食べてしまいます。千松は毒に苦しみ始めますが、それを見た一味の八汐は、悪事が露見するのを恐れて、すぐさま千松を刺し殺してしまいます。政岡は、お上へ無礼を働いた千松は、成敗されても仕方がないと言って、悲しみを押し隠します。栄御前は、八汐の働きを褒めて帰って行き、一人になった政岡は、千松の遺骸を抱きしめ悲嘆にくれるのでした。

(その後、別間より様子を窺っていた八汐が現れ、政岡を亡き者にしようとはしますが、八汐の悪事は白日の下にさらされ、政岡は八汐を倒して千松の仇を討ちます。)

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

政岡忠義の段

襖押開かせ梶原平三景時の奥方、夫の権威に栄御前しとく座に直り

「オ、どれくも出迎ひ大儀、自ら今日来りしは右大将よりの御上使、夫景時承はれども義綱の一子鶴喜代、病氣によつて男たる者を禁じたと聞きし故、夫に代るこの栄、義綱隠居のその後、鶴喜代の所労ことに食事も進まぬ由、御心を付けられしこのお菓子、頼朝公より下され物、有難く頂戴あれ」

と持たせし菓子箱、差出せば八汐引取り

「コレハく有難い、大将よりの下され物。サアサ

ア申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」

と蓋押開き

「デモマア見事、結構なこのお菓子、イザ召しませ」

と差出す。さすが童の嬉し気に立寄り給う鶴喜代君「ア、申し御前様、またその様なさもしい事、御病気の御身なればお毒になつたら何となさるゝ、こつちへお越し」

と政岡が詞打消す栄御前

「ヤア頼朝公より下さる、御菓子、何疑ふて頂戴させぬ。ぜひ、この栄が食べさせる」

「アイヤそれでも」

「ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しいかい」

「サアそれは」

「サア」

「サア」

「サア」

「サアくく」

と権柄押し。奥より走つて千松が

と引摺み何のぐわんぜも唯一口八汐がびつくり栄御前、毒の工みの現はれ口忽ち悩乱、目を見詰め蹴散らかしたる折は散乱。八汐はすかさず千松が首筋片手に引寄せて懐劍ぐつと突込めばわつと一声七転八倒驚く沖の井政岡が仰天ながら一大事と若君抱き、わが部屋へ押やり参らせ、戸口に付添ひ守りいる。

「ヤア何をざわ／＼騒ぐ事はないわいの。忝けなくも頼朝公より下されしこの折、踏破りしは上への無礼、小さい餓鬼でも、そのまゝには差置かれぬ。それ故に手にかけては、お家のお為を思ふ人汝が忠節ム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。オ、可哀そうに可哀そうに痛いかいのうマ痛いかいやい。他人のわしさへ涙がこぼれる。コレ政岡殿、現在の其方の子、悲し

「何のマアお上へ対して慮外せし千松、御成敗はお家の為」

「ム、スリヤそれでも此方は何ともないかや、これでもかこれでもか」

となぶり殺しに千松が苦しむ声の肝先へこたゆる
辛さ無念さを、じつところゆる辛抱は、ただ若君が
大事ぞと涙一滴目に持たぬ男勝りの政岡が忠義は
先代末代まで、またあるまじき烈女の鑑、いまにそ
の名は芳しき。栄は始終、政岡がそぶりに氣を付け
打ほゝ笑み、

「オ、でかした八汐、右大将より鶴喜代へ下さるゝ
大切のお菓子、小倅めが出しやばつて、すつての事
に大事の工みイヤアノ大事の菓子を荒らした科、殺
したは八汐が働き、さすが渡会銀兵衛が妻ほどある。

政岡には自らが言ひ聞かす事もあれど、まづ今日は立帰り病氣の様子申上げん、必ず／＼何事も人に悟られまいぞや」

と一人呑み込み悠々と館をさして帰らるゝ。

後には一人政岡が奥口窺ひ／＼て、わが子の死骸抱き上げ、耐へ耐へし悲しさを一度にわつと溜涙、せき入、せき上げ嘆きしが

「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたナ／＼、其方が命捨てた故、邪智深い栄御前、取替子と思ひ違へ、己が工みを打明しは親子の者が忠心を神や仏も哀れみて鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。

ハ、ハ、有難や／＼。これと言ふのも、この母が常々教へておいた事、幼な心に聞分けて手詰めになつた毒害を、よう試みてたもつたのう。オ、出かしやつた出かしやつた／＼、其方の命は出羽奥州五十

四郡の一家中、所存の臍を固めさす誠に国の礎ぞや。とは言ふものの可愛やなア、君の御為かねてより覚悟は極めていながらも、せめて人らしい者の手にかゝつても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃にかゝり、なぶり殺しを現在に傍に見てゐる母が氣は、どの様にあらうマどうあらう。思ひ回せばこのほどから歌ふた唄に『千松が七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ』と唄の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔をば見する事もあらう。同じ名のつく千松の其方は百年待つたとて千年万年待つたとて何の便りがあるぞいの、三千世界に子を持つた親の心は皆一つ、子の可愛さに毒なものの食べなと云ふて呵るのに、毒と見へたら試みて死んでくれないと云ふ様な胸欲非道な母親が又と一人あるものか。武士の胤に生れた

は果報か因果かいじらしや、死るを忠義と云ふ事は
何時の世からの習はしぞ」

と凝り固まりし鉄石心、さすが女の愚に返り人目な
ければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき前後不覺に
嘆きしはことわり過ぎて道理なり。